

東邦大学学術リポジトリ



OPAC

東邦大学メディアセンター

タイトル	生物学研究室:問題山積?
別タイトル	Department of Biology: The long and winding road?
作成者(著者)	平, 敬宏
公開者	東邦大学医学会
発行日	2015.03
ISSN	00408670
掲載情報	東邦医学会雑誌. 62(1). p.78 79.
資料種別	学術雑誌論文
内容記述	教室(診療科)紹介
著者版フラグ	publisher
JaLCOI	info:doi/10.14994/tohoigaku.62.78
メタデータのURL	https://mylibrary.toho-u.ac.jp/webopac/TD86559767

教室(診療科)紹介 (96)

問題山積?

生物学研究室

教授：平 敬宏
 講師：杉森賢司
 只野ちがや
 助教：中村真樹

生物学研究室は、2013年4月に平が山梨大学医学部から、同時に只野が本学体育学研究室から移籍し、現在上記4名の教室員で構成している。

教育担当科目として、リメディアル科目「基礎生物学」、準備教育科目「人体生物学」、「細胞生物学」、「運動科学」、「細胞生物学実習」、「全人的医療人教育I」、「PBL テュートリアルI」および選択科目「細胞の生物学」、「特殊環境の生命を探る」、「バイオインフォマティクス入門」、「スポーツ科学演習」などさまざまな科目を担当している。この他

にも、基礎医学科目「生化学」、「末梢神経・筋系」、「放射線医学(基礎編)」、「統合型社会医学実習」の一部を担当している。

現状での教育面での本研究室にとっての最大の課題は、バラツキがある入学者の生物学基礎学力レベルの解消・克服である。本学を始め多くの医学部入学試験では理科2科目が課せられている。そのため、受験生の多くが「化学」と「物理」を選択し、高校で生物学を一部のみ、または全く学んだ経験のない入学者(未履修者)が急増している。このため、入学者間での基礎的生物学知識の差が激しくなっている。

このような現状の克服に取り組んでいるが、生物学未履修者の増加、昨今の高等学校理科指導要領改訂により高等学校生物学では、メンデルの遺伝3法則、基礎発生学などが完全削除または大幅な割愛が行われるなど、底上げへの障害が増加している。現状克服のために、リメディアル科目充実、生物系選択科目増設、補習科目開講など実効性が伴う努力が今後ますます重要になっていることを痛感している。

また、主な教育対象学年が1年生であるため、大学生活に不慣れな10名前後の新生入生担任(メンター)として、入学直後のフレッシュマンキャンプから修学指導にあたっている。この面では他大学でも問題化している、若者の「社会的モラル低下」、「自己未成熟」などを発端とする複雑な問題を抱える学生が少なくない。そのため、一般教育の各先生、健康推進センターと密に連携して問題解決への手助けに臨んでいる。

そこで問題解決の最初のきっかけとして、教員居室およ



2015年度入学試験会場にて
 左より、只野(講師)、杉森(講師)、平(教授)、中村(助教)

び研究室が講義室・実習室と近接していることもあり、学生が質問や相談に気兼ねなく教員を訪ねてくれるような、敷居の低い研究室環境作りを心がけている。

一方、研究面においては、研究時間の確保、狭隘な研究環境などの制約にもめげず、各教員が「疾患発症の分子生物学的研究」、「特殊環境生育微生物の生態と応用研究」、「運動と筋肉・神経への影響研究」、「微細藻類を用いた光合成研究」などの研究テーマに取り組んでいる。医学科における生物学教育は、基礎医学科目の導入科目であることから、構造（形態）・生理機能・分子生物学などさまざまな領域を教育する必要がある。そのため、各教員の研究専門領域を

より活性化し、研究とともに教育へもフィードバックすることをめざしている。そのため、教員の高年齢化に対抗して研究活性化するため、若い方々の研究参画を模索している。さらに、学内外との共同研究から研究の推進を図っていきたい。

以上のように、本研究室の抱える教育および研究面での課題は山積みであるが、「より良き臨床医」養成へむけ、熱意を失わずさらに教員間の連携を図り、長く曲がりくねった道を歩み続けたいと考えている。

(教授：平 敬宏)